

■■■ 13-25 ■■■ == => 鳥の話

13. 家に飼われていた鶏から、野の鳥の方に眼を移すと、そこにも別の意味で著しい変化があった。以前は屋敷の居廻りなどに、山鳩なども非常にたくさんいた。家の表に立つと、前の麦畑に鞠でも転がしたと思うほど、半円の隈をくっきりと見せて、無数に散らかったものがある。それがことごとく山鳩の胸であった。



今日のように桑がどの畑にも植えられなかった頃のこと、所々にある茶畑には、冬から春にかけ、茶の実をあさる鳩の群れが、二、三〇ぐらいも渡って来た。テテッポーと頓狂な鳴き声が、屋敷近くの木立から、この頃汽笛を聞くように絶えず流れて来た。それが近頃では、パタパタとあの鋭い羽音一つにも、物珍しく空を仰ぐほどになった。

しちりこう

14. 私の家にあった椿と金木犀の大樹には、冬になると夜の引明けから種々な鳥が次々に渡って来て、暫し羽を休めていった。つぐみが来た。ひよどりの群れが来た。羽毛の美しいかしどり（かけす）もときおり立ち寄った。よく囀る四十雀の群や、山雀のつがいもあった。眼白の群れは日に幾組となくやって来た。くっきりと晴れた冬空を、高くチーチーと鳴き渡ってゆく眼白の群れが、急に思い出したように舞下って来たりした。また、裏の清水の湧く谷には、朝夕かならず山鳥が寄っていて、人の足音を聴いて、ドドドーと地響きとさせて舞い立ったもので、時には背戸口の笥の下に遊んでいたこともあった。今考えると、私などの生立ちは、これらの鳥の中で育まれて来たのである。

15. 数年前東京の郊外を歩いている時、藪陰からチチと鳴いて飛び出して、傍らの桐の梢に止まった小鳥を見ると、幼少時代この方、絶えて久しく忘れていたあおじという小鳥だった。それを見て今さらあくせくした生活が回顧され、この懐かしい友の姿をしばしみつめたものであった。幼少の頃に朝起きて顔を洗うべく背戸の笥にゆくと、先ず目に触れるのは、そこの地面に遊んでいるこの小鳥の三つ四つであった。ひしゃくの柄に白い糞が置いてあったりした。見た眼には薄汚い目のしよぼしよぼした、婆さんのようで、不思議に親しみの多い鳥であった。日中でも土蔵の裏や、納屋つづきの密柑畑にゆけばかならずいた。巨きな柑子の樹が、畑一杯に繁りかかっている、根元のあたりは昼でも暗い、そこにもきまって遊んでいた。前

の茶畑にも楮畑にもいた。やぶちっちまたはやぶすずめと呼んだもので、いつも澄んだ金属性の声でチッチッと鳴いていた。くびっちょという罌を、生まれてはじめて自分の手で作った時、第一番に掛かってくれたのも実はこの鳥であった。家近くの桑畑に、桑の梢を曲げて造ったのが、夕方みるともうバネが外れて、曲げた桑の梢が伸びている。胸を躍らせて近づくと、鳥は地面にぴったり打ち敷かれて、まだ生きていた。それを掌の裡に握りしめて、どきどきと温かく脈の響くのを、母のそばに見せに走ったものであった。

16. やぶちっちと同じような恰好で、今少し大きい頬白がいた。いつであったかその頬白が、麦の畝を幾つとなく並んで、鳴きながら前進する。萱の穂で作った矢を弓につがえてさっと射ると、白い矢が麦の上をかすめて飛んで行った。頬白は一斉に飛び立って逃げた。その頬白の巣を、家の表を囲った杉垣に見出した時は、さすがにいじらしかった。

胸の部分が赤くて背の黒いところに、真白い斑のある団子背負い（ひたき）も、二つ三つはきまって家の近くに遊んでいた。尾を振るたびに、ヒュッヒュッカカタと音を立てる。あるとき家から最も遠い茶畑に、くびっちょをかけて、幾日も見廻るのを怠っていた。思い出して視に行くと、この団子背負いが掛かっていたが、百舌鳥にでも荒らされたと見えて、背の部分が破かれてそこから赤い肉が出ていた。罌を外して捕りはしたが、さすがに家に持ち帰る気になれなくて、そのまま友だちの家に持って行った。その家の爺さんが羽毛をむしり取り、串にさして焼いてくれたが、食べる気にはなれなかった。

17. 山へ行って木を伐ると、ばかったらし（るりひたき）がすぐやって来た。そっとそこいらに待ってでもいたようであった。追っても遠くへ逃げようとしない、小父さんとでも言いたいような蒼い鳥である。父や母に伴われて山へ往っても、この鳥がいるので退屈しなかった。幹の間にいる虫を捕って食うのだというたが、それだけの目的とは思われない。遊び相手に来てくれたとしか考えられぬような鳥であった。

尻こき爺さんの昔話で、爺さんが手に据えて舐める間に、つるりと呑み込んでしまったというちょんのすずめを、いつかこの鳥に結びつけて考えていた。

18. このばかったらしを、二、三間の距離から狙って撃ったことがある。撃つと同時にぱっと一尺ほど跳び上がったまではたしかに見た。ところでそれがどうしても見つからない。道の小石の上に紅い血が二、三滴落ちているのだし、遠くへ遁

げる隙はないのに、何べん草を分けて捜しても見つからぬ。もともと悪戯半分に撃ったまでで、どうしようとの目的はないが、死骸が見つからぬのは気になった。しかしよいよいないと極めて、立ち去ろうとすると、道から二尺ほどはなれた春蘭の葉陰に潜んでいた。躊躇なく掴み上げると、腹のあたりべっとりと血に染まって生きていた。夢中で道に叩きつけたが、何とも言えず後味が悪かった。

19. 納屋の口の土間の薄暗がりにはみそっちょ（みそさざい）がいた。敏捷にさっと立臼や水甕の間などをかすめて翔ぶ。体は小さく羽色も冴えぬが鷹の属で、巨きな猪の身の中に飛び込んで、ついに負かしたという説話が勇ましくて、学校の先生に論わった以上に、強く感銘を受けたものであった。

20. およそ朝起きるから夜寝るまで、往く所に鳥がいたもので、夜でも外に出ればそこには夜鷹（みみずく）が翔んでいた。その頃子供たちの仕事と言え、秋から冬にかけては、小鳥を捕らえて飼うことで、頬白からあおじと、何でもあれ手近から捕えて飼った。眼白や山雀を飼うなどは、幾分年たけてからであったように思う。飼鳥の数が日ごとに増えてゆくのに鳥籠が不足して、急場のしのぎに素麺の空箱の一方に竹のひごを挿し並べて、そこに種々の鳥を三羽も四羽の容れておいた。人が近づくと驚いて、箱の中を右に左に羽敲きして逃げ廻る。それを陽当りの戸袋などに掛けておく。どこの家にもこの種の鳥箱が一つや二つはおいてあった。

冬の夜など眠る前にこの鳥どもが気になって、寒かろうの心遣いから、脱いでまだ温もりのある袴纏を箱の上からそっと掩いかけた。こうした時の気持ちは、言葉では説明の出来ぬ安らかなものであった。永らく飼っていた眼白の雌を、何かの拍子に遁がしてしまっ、どうしても籠に還らぬのに、はては涙ぐんで後を追って行った。舌切雀の爺さんそのままであった。夕景が迫って四辺が薄暗くなると、さすがに鳥も心淋しくてか、こちらの吹く口笛に近づいて、笥の水船の縁に止まって水を呑んで鳴いた。そっと籠の口を差し出すと、鳥が跨いではいった時の嬉しさは忘れぬものがあった。また、久しく飼い馴らした眼白が、朝見ると止り木の下に仰向けに墜ちて死んでいる。それを畑の隅の人のあまり踏まぬところに埋めたのも、今思えば子供らしい供養であった。永く飼い馴らしたというても、一年には達しない。秋に捕えたのを春まで飼いつづければずいぶんと永いように思うたのである。

21. よく母が涙ぐんで話してくれた。村の物持ちの家が零落して、親子が手に手をとって東京へ夜逃げする時、一番末の一三になる男の子が、飼い馴らしていた眼白の籠を提げて行った一条は、涙なしには聞かれなかった。藁草履の緒が痛い

むずがるのに、緒の間に白紙を畳んで挟んだというのも、頭から悲しい話として聞かされた、ことに眼白を連れて行ったという子供の気持ちには、同感を禁じえぬものがあった。

22. 話の筋がまた変わるが、小鳥を捕える罠一つ作るのにも、鳥がさかんにいた頃と、だんだんと少なくなった後とでは、自ずと違っていた。前に言ったくびつちよという罠は、こぶちという人もあった。これは子供にも手軽に出来る方法だけ

に、ままごとらしい要素が多分にあった。その作り方は、先ず躑躅の新芽の七、八寸に伸びて、先に葉が二、三枚ついているのを折って来て、鳥の集まりそうな地面へ半円形に挿し並べる。そうして上端の葉のある部分を束ねて赤い糸などで結んで屋形らしくした。躑躅の茎で囲った中は満遍なく小さな掌で叩いて餌を置く。一方

の開いた口に設ける罠は、青い苦竹にがこだけで作った。中に置く餌は、米櫃から掴み出して来た真っ白い米粒、それに紅い万両の実、瑠璃色をしたねこだま（竜の髯の実）、南天の真っ赤な実などで、米は雀、万両の実はひよ鳥、ねこ玉はひたきにと言ったふうに、色どり美しく並べておいた。事情を知らぬものが見れば、綺麗なままごとと思うに違いない。強いて説明すれば、美しい色彩で誘うと言えるかも知れぬ。餌だけではない、囲いに立てた躑躅の茎の、  
代赭と緑の葉の対照がすでに美しかった。どう観ても、殺伐な罠を思わせる要素はみじんもなかった。



ねこだま（竜の髯）

23. しかしそれで盛んに小鳥が捕れたところから考えると、鳥もまた作る子供の心理を、そのままに享け入れていたのかも知れない。ふしぎなことにひとたび鳥の掛かり出した罠には、毎日のように掛かった。ここにも運命の不可思議に目醒める鍵はおかれてあった。それがだんだん鳥が少なくなってからは、罠も巧妙に人工の痕を見せぬ工夫をしたが、それでも、以前のようにもう掛からなかった。

24. 私などの経験では、物の哀れなどということも、あるいは鳥などから論わった事実が多かったように思う。極幼い頃、隣屋敷の朋輩と二人で、土蔵の前の空地に米を撒いて、それに集まる頬白を、鼠捕りの柵落しを真似て、篩を用いて捕えようとした。戸袋の陰に隠れていてこれなら五、六羽は確かに捕れると思い、さっと支柱に結んだ綱を引くと、篩が落ちると同時に、鳥はことごとく遁げ去ったが、一羽だけはたしかに入った。駆け寄って手に掴んで視ると、羽の美しくない雌で、し

かも、右であったか左であったか、片一方の脚が曲がっている不具であった。

25. 屋敷林に渡って来る眼白を、罎を使ってもち藪で捕る時、雌雄一つがいの一方だけ捕えて、後を捕り損じた時の気持は平静ではなかった。いつであったか霜の朝

早く、渡って来たつがいの雄を捕えたが、後の雌がどうしてももち藪にかからぬ。藪の傍までは来るが、それ以上は警戒して近づかぬ。その後は高く梢に上って行って悲しげな声で鳴いている。どこかに去ったと思っていると、日の暮れ方にまた還って来てそこで夜を明かした。朝床の中で眼を醒まして、第一に耳朶を打つのはその雌の声であった。他の群れが渡って来ると、一旦は紛れて従いてゆくが、思い出してかまた一飛びに還って来る。こうして一週間も続いたにはこっちが参った。数多く眼白を捕えた中でも、こんなのは最初の最後であった。